



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雑報. 地球 1933, 19(1): 78-82

ISSUE DATE:

1933-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184119>

RIGHT:

繁榮衰類。鑽石・品位・設備等、第二篇鑛山の評價に關する事項、第三篇探鑛概念、第四篇選鑛に關する事項を述ぶ。鑛業に直接又は間接に關心を持たるゝ人、地質學者、學窓を出でたる新進技術家などに鑛業の輪廓を示す上に於て極めて適當な著書である。(上治)

### ○人文地理學の基礎的知識

淺井治平著 東京目黒書店發行 定價三圓

四六版四一六頁、索引つき、附録として文檢の地理問題がつけてある。一章から七章まで、地理學の發達から自然と人文の關係に及び人類地理、聚落地理、經濟地理、交通地理、政治地理の五部門にわたつて、簡單に其要點を叙したものである。行文亦流暢、凡そ現代地理學の輪廓を知るには適當な本であると思はれる、初學者の良參考となるであらう。(F)

### ○郷土と産業

佐藤弘、山本二郎著 雄山閣發行 定價一圓六十錢

菊版二百十頁の小冊子であるが、日本の産業について各地方別に簡潔に要領を記したものである、但し本州、四國、九州に限られて北海道や臺灣には及んでない。(F)

## 雜報

### ○天津港の背後地

天津は明末清初には渺たる一駐兵地

であつたが、民船來往の要地となり、李鴻章の直隸總督となつてから、天津は頓に發展し河北山東及東三省を商勢圖とし、更に近くは山西、河南、遠くは陝西、甘肅、新疆、蒙古より仕入客がやつてくるやうになつて、明治三十二年貿易額七千七百萬海關兩となり、翌三十三年義和團の亂起り貿易も三千二百萬海關兩に減じたが、日露開戦の際、兩國軍需品の調達地となつたので俄に商況が活潑になり三十八年には九千六百萬兩の貿易額に上つた、その後一進一退、大正八年には世界好景氣のため一億九千萬テールの貿易額を示したが、爾來陰に陽に排日貨が起つて、國內不安であつたけれども、大正十年以後二億海關兩に達し、昭和二年以後は三億海關兩以上の大増進をなし、支那では上海、大連について第三の位置に達した、この三大港につぐものといへば漢口、廣東、青島、汕頭の順序であつて營口、安東、哈爾濱、重慶、九江、九龍、寧波、蕪湖、厦門、福州、長沙、南京、秦皇島、芝罘等は一億海關兩以下三千萬海關兩の間に出入するのであるから(以上昭和五年度統計による)何といつても天津は北支那第一の貿易港である。これ實に其背後地の廣大にして水運(民船)陸運の便を兼ねてゐる結果である、たゞし近年になつて外蒙古共和國がソヴィエトの使嶽の下に張家口、庫倫間の通商路を閉鎖したこと、海河の泥塞があるので、汽船が塘沽より上へ溯航の出来ないといふやうなことは、共にこの港の貿易に對する大なる支障であるけれども、それでも將來の見込は確實

にこの港の繁榮を約束する、今この港に集る棉花を見ると印度棉の輸入もあるが、大體は北支那の産で、子牙河筋より移入するものと、滹沱河筋より出廻るもの最も多く總量の三十五％に達する、御河筋より出るものは十％、平漢線によるもの三十％、天津東北地方から三％を出すので、輸入合計千八百二十萬貫（印度棉三百二十萬貫）、この内六百二十萬貫を消費し、本邦へ九百六十萬貫、米國へ八百八十萬貫を輸出する、山西省の棉花は正太鐵道で河北省に出るものが八十％、残り河南省へ出るが、石家莊の紡績工場で消費される。

つぎに生牛の移入四萬頭、天津で消費三萬頭に達し、輸出一萬頭であるが、河北の生牛の第一の集散地は北京の東方三河縣にある夏熱である。この地へ年に二萬五千頭といふものが熱河、平綏方面からくる、この中一萬頭は天津へ、残りは北平に仕向ける、この北牛に對して南牛といふものが山東に出る、荏平から德州をへて滄縣の牛市にでるか又滄縣をへずして直接に天津、北平へ出廻る、天津へ来るものは約一萬頭に達する、滄縣につぐ第二の集散地は有名な易州であつて一箇年三千頭に達する、これも蒙古牛であつて大部分は天津に仕向ける、これらの牛は汽車によらず徒歩にて出廻るものが多い。

鶏卵は河北省の唐山を中心地とし年額二十萬貫を移入し、附近の産二十萬貫を合せて、年四十萬貫を出す、これはすべて天津に向けられる、つぎに泊頭鎮から二十四萬貫を天津に

に向ける、其他御河筋、子牙河筋の如き水運で百數十萬貫、鐵路にて大同附近の卵も入つてくる、そこで天津で消費五十萬貫、輸出するものが二百萬貫見當で、日本へは生卵として輸出する、つぎに綿羊毛の天津出廻りは年平均四百六十四萬貫で天津で消費するもの六十四萬貫、米國へ輸出するもの三百四十萬貫、日本へ四十萬貫其他約二十萬貫で、年によつて大差がある。包頭から北平に通ずる平綏線の産が八十％、順德方面から十％、熱河省から五％を出す、其羊毛の集散地は包頭、張家口、多倫、赤峯、歸化城、順德、交城、豐鎮等为主として外蒙古に近い、いづれも綿羊皮の集散地であると同時に山羊皮、牛皮が集散する、夏熱は牛のみでなく羊の集散中繼地で年に十萬頭の賣買がある、易州は之について八萬頭の取引をする、いづれにしても天津の背後地として河北の外に蒙古と山西、新疆等が主要なる商圏であることがわかるであらう。

## ○英國の石炭業

戰前の世界の石炭産額は年平均十億七千八百萬噸位であつたが、大戰以後石炭の自給自足をはかる國が多くなつた結果一九二九年には世界の石炭産額は増加して約十三億噸となつた、即ちドイツ、ポーランド、以下歐洲大陸諸國の出炭増加著しく、何れも外國炭の輸入を防止すると共に自國品の輸出を努めたため、自然英國の炭業に影響し、一九三一年には英國は全出炭能力の七〇％を發揮したるに過ぎず、其産額二億二千萬噸で一九〇一年以來の最低記録とな

つた。

元來英國石炭の約三分二は國內消費で、残りの三分一が輸出向である、所が國內消費の大宗たる鐵鋼業が之又不況に沈みつゝあるを以て、出炭高は自ら縮減した、其他鐵道、造船業、機械工業、紡績業等の消費又夫々減少せるは云ふ迄もない。

英國炭鐵業不振の禍根は英國炭鐵が概ね小規模なるもの群立する事實に歸せねばならぬ、例へば一九二九年の統計によれば、同年の産額二億五千八百萬噸中の九二・五%は一、一二九炭鐵（經營者三七二）より、又殘餘の七・五%は一、〇三〇炭鐵（經營者八六六）より採掘されたのである。之等群小の炭鐵を整理統一し合理化を計らんとする聲は久しく叫ばれ、一九三〇年十二月設立の改造委員會では、全國產炭地方を六大別し、夫れ夫れ區内の小炭坑を整理閉鎖し、他方大炭鐵に作業を集中せしめんとしたけれども容易に實行が出来ない。しかし漸次新式作業に移つてはゐるけれども、かうした群小炭鐵の存在は採掘費の生産費を増加し、勞銀がかきむので、自ら資本主から賃銀引下げ、勞働時間延長を要求するに至り、こゝで大罷業が勃發するに至つたが、一九二六年七月のストライキの後、一九三一年までは、八時間勞働、賃金据置になつたが、猶一二年は現狀ですゝむらしい。

つぎに英國内の石炭消費狀況を見ると、其減退著しく、鐵鋼、鐵工業及炭鐵での消費が目につく、これは一は鐵鋼業

の衰退で、一は炭鐵自體の不振をしめすのであると共に電氣業の消費が一面に増加した、そこで鐵道や、諸工業の直接石炭消費を減ずる結果になつたが、この方面は好ましい現象である。瓦斯事業の如き、段々と進歩するので、瓦斯發生力四%五を増大せるに對し、實際石炭消費高は僅に八%五しか増加しないといふ有様である。

石炭を無暗に消費することは好ましくない、鋼鐵業の如き作業進歩のため、一九一三年純鐵一噸に要した石炭四二〇セツト及鋼一噸に同三〇 Cwt であつたが一九三〇年には三七・八 Cwt 及二三・二 Cwt に減じたといふ進歩である。故に石炭の消費の減退は必しも工業の衰退を語るのではないが、英國政府は鐵工業の國家に重要なを痛感し一九三二年には外國品に従價三三・一%の輸入税を課して之を保護するに至つたから間接には石炭鐵業も餘慶を蒙ることになつてゐる。

鐵鋼業の外に石炭消費の見込のある瓦斯電氣工業と雖も俄に石炭消費額の増加望み難き今日では、石炭新需要の途を開かねばならぬといふので、例へば石炭粉化、炭油混合、低溫炭素化等の研究が起つて船舶其他の燃料として重油の侵入を防がんとするに至つた、最近注目すべきはキューナード汽船會社の特許にかゝる Colloidal Fuel といふは石炭を粉末とし、之を重油六に對し四の割合にて混合する燃料であつて比重は一・一度である、重油のみの燃料に比して高熱を發するの利あり、石炭の灰分は瓦斯と共に上昇して烟にならない、加ふる

に本装置は従来の重油燃焼装置には極めて簡単に取付けられるといふ利がある、さうして現在安値の重油に比しても一噸五—一〇シル位の節約となる譯で、石炭利用の新用途を招くことになつた、これは我國では撫順炭を利用する上に好參考となると考へられる。何となれば丁度撫順炭は揮發分が多くて、これに適するからである。

### ○萬年マツチの發明

オーストリア國化學者ビンゲルは繰返して使用し得らるゝ萬年マツチを發明し既にオーストリア及スイスで製造をはじめた、本マツチは灰分をのこさない可燃燒材料及發火材料とから成立し、前者はマツチの棒となり後者は摩擦面を組成する、火がついたのち、之を吹消して再度の使用に供する、棒はニトロセルローズ、又はその誘導體(セルローズ・アセテート)であつて、これに燃焼及機械的性能並成型に便宜な組成物例ば樟腦、ナフタリン、ニトロ・ナフタリン等を混する、其他に摩擦力を増進すべき物質例へば硝子粉、輕石粉なども混合物として使用されてゐる。

### ○世界主要海運國の全噸數及繋船數

國名	總噸數	繋船噸數	比率
英國	一、九六三、〇〇〇	三、四三〇、〇〇〇	一八%
米國	一、三〇四、〇〇〇	三、三三三、〇〇〇	二四%
ドイツ	四、一五五、〇〇〇	一、七五五、〇〇〇	四二%
フランス	三、五五七、〇〇〇	九八三、〇〇〇	二八%
ノルウェー	四、一七六、〇〇〇	八四三、〇〇〇	二〇%

イタリー	三、五二一、〇〇〇	六、三三三、〇〇〇	三三%
オランダ	二、六四〇、〇〇〇	五、五五五、〇〇〇	二〇%
日本	四、三三三、〇〇〇	三、三三三、〇〇〇	二八%
デンマーク	一、一八八、〇〇〇	三、四〇〇、〇〇〇	二〇%
スエーデン	一、七六六、〇〇〇	一、五五五、〇〇〇	二〇%
ギリシア	一、四〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二二%
スペイン	一、三三三、〇〇〇	三、三三三、〇〇〇	二二%
其他	八、四六六、〇〇〇	一、六六六、〇〇〇	二〇%
合計	六、九七六、〇〇〇	一四、一五五、〇〇〇	二〇%

繋船率の最高はドイツの三三%であり最低は日本の八%である。(昭和七年七月報告)

### ○露國グロースヌイの石油

從來露國石油といへばバクーを聯想しグロースヌイ(Grozny)石油については、世に知らるゝ事少かりしが、近年其發達著しく、今ヤソウイェツト聯邦石油中主要なる地位を占むに至つた、グロースヌイは北高加索のゴルスカヤ共和國にありて、其探油は一八九二年乃至一八九五年にして、英國資本家ノーベリ及米國のスタンダードが着手したのに始まるが、當初は小規模であつた。グロースヌイの探油鑛區は新舊二ヶ所に分れ、舊鑛區は市の西北方約十八キロメートルの地にあつて前記二資本家の企業にかゝりたるも、現在は各油井共に汲疲れの狀にあつて不振なり、しかしその鑛井の深さを現在の千四百米から二千米乃至二千五百米に達せしむれば、更に新たな油層に達すべ

しとの確信あり、將來此方面に於て復活の可能性ありといふ、次に市の東南、鐵道を隔て、約三キロメートルの地點に於て全然ソグイエトによりて企業化されたる新鐵區あり、石油埋藏量は舊鐵區に比して餘程豊富に、油井塔密立し其數一九三〇年末に五百七十基なりしも、今日は既に千基に達し、現在ボーリング中のもの既に六十個を算し、新區全體の產油量は一晝夜二萬四千噸に上る、又自然瓦斯よりガソリンを製造する裝置はグローズヌイに五ヶ所ありて其一つは一晝夜に四萬噸の瓦斯より百四十噸のガソリンを製造する能力あり。

採油に従ふもの舊鐵區に約四千人、新鐵區に於て約一萬三千人を算し、其内約四十人の獨逸人米國技師又は熟練勞働者あり。本年度のグローズヌイ全生産計畫は原油の採取豫定八百五十萬噸之に自然瓦斯より製造するガソリンを加ふれば大約九百萬噸とする、勞働者住宅設備の完備せること驚嘆の外なく、宛然別荘の如く其外俱樂部、病院、技術家養成の學校等の完備し居ること實に至れりつくせりである。

グローズヌイと黒海のトアプセ港との間には直徑十時の鐵管を布設し、其能力は年百八十万噸に達す、然しこの地の原油はそのまゝにてはパイプ輸送に適せず、一度精製せる輕油を混じたるものを流送し、トアプセ港にて再製工場にかくる由也。

東京地質學會、日本岩石礦物礦床學會、地球學團、日本地理學會及日本火山學會との聯合講演會開催豫告

一、開催地 東京

一、開催期日 昭和八年四月二十二日(土)(午後一時—午後六時)、二十三日

(日)(午前九時—午後六時)

講演希望の方は演題及講演所要時間(二十分以内)を記し來る三月十日までに東京帝國大學理學部地質學教室内東京地質學會宛申込ましたし因に講演申込多數なる時は講演時間の短縮又は申込順により謝絶の止むを得ざることをあるべし。又參考展覽會に出品希望の方は標本説明書を送附されたし。

尙四月二十二日夜には聯合懇親會、會後二十四日(月)には見學旅行を行ふ豫定なり、委細後報。

地球學團